The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	南琉球宮古語池間西原方言におけるdu焦点構文と述語焦点形
Author(s)	林, 由華
Citation	阪大社会言語学研究ノート. 2017, 15, p. 87-99
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/67214
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

『阪大社会言語学研究ノート』第 15 号（2017 年 11 月）87-99

南琉球宮古語池間西原方言における du 焦点構文と述語焦点形[1)、2)]

林　由華

【キーワード】南琉球語、焦点、情報構造、非焦点形、述語焦点形

【要旨】

池間西原方言には、琉球諸語全体に認められる焦点標識 =du がある。本稿では、(i) この =du をもちいた焦点構造（du 焦点構文）のもつ構文的特徴の記述、および（ii）動詞活用形のうちに =du を付与された要素と同様に焦点形として機能するものがあることを示すことを目的とする。(i) については、du 焦点構文では焦点範囲の開始位置を表示する仕組みを持っており、それは「 ①焦点範囲開始位置より前の要素（焦点より左の要素）に非焦点助詞 =a を付与する ② 焦点範囲の開始位置（焦点の左端の要素）に焦点助詞 =du を付与する」という 2 重のマーキングによって行っている。(ii) については、述語焦点を表すものとして（語源的に） =du を含む動詞活用形および =du を含む補助動詞構文があるほか、=du を含まないが述語のみが焦点であることが指定された活用形がある。それらは、上記の①②の特徴を満たすという点で =du が付与された要素と同じ特徴をもつ。

1.　はじめに

南琉球宮古語池間西原方言[3)]（以下池間西原方言とする）には、琉球諸語全体に見られる焦点標識 =du を用いた焦点構造（du 焦点構文とする）がある[4)]。また、焦点に付与される =du に対して、反対に付与された要素を非焦点化する非焦点標識 =a および =gyaa も

1）　本研究は、JSPS 特別研究員奨励費（課題番号 20・6104, 25・40096, 17J10117）の助成を受けて行った調査を基にしている。本稿では、主として西原地区の 3 人の話者（昭和 2 年生女性、昭和 18 年生男性、昭和 23 年生女性）に対する面接調査により得られたデータを用いている。本稿のもととなる発表について、渋谷勝己先生、高木千恵先生はじめ、阪大社会言語学ゼミナールの皆さま、また、本稿の草稿について、ケナン・セリック氏、浅尾仁彦氏に有益なコメントをいただいた。協力・助言いただいた皆様に対し、ここに感謝の意を表する。

2）　本稿は、基本的に著者の博士論文である林（2013）の一部で扱った現象・アイデアを基に、修正し書き換えたものである。

3）　池間西原方言は、宮古島市西原地区で話される宮古語の一方言である。宮古島市の池間・西原・佐良浜の 3 地域で話される方言のうちの一つであり、この 3 地域で言語の違いはあまりなく、池間方言としてまとめて扱われることがほとんどである。しかし、本稿で扱う形式の一部（特殊焦点形）はこのうちでは西原でしか観察できていないものであるため、本稿ではこれを西原に特化したものということを明示するため、池間西原方言としている。

4）　述語（動詞活用形）の種類によっては焦点に =du を付与しない・できない場合もあるが、本稿では du 焦点構文のみを扱う。du が付与できるかできないかについては、林（2016）を参照。また、特に du を用いない場合、義務的ではないがイントネーションも焦点構造に関わると考えられる。しかし、本稿では特にイントネーションについては触れない。

持っており[5)]、述語以外ではそれぞれ語句末（文節末）に付与される助詞である。この焦点助詞 =du と非焦点助詞 =a, =gyaa を合わせて IS（information structure）助詞と呼ぶ。du 焦点構文は、この焦点助詞と非焦点助詞の両方を用いて焦点を表示するシステムを持っている。(1) に文例を示す。

(1) ba=**a**　mai=yu=**gyaa**　ssara=nkai=**du**　muci　ifu-tai
1.sg=**NFOC** 米=ACC=**NFOC2**　平良=DAT=**FOC** 持つ.CVB　行く-PST
「私は米を平良に持っていった」

基本的には語順やイントネーションでなく、形態論的方法（接語付与）により位置をかえずに（in situ で）焦点を表示する言語といえる。つまり、「焦点とする要素に =du を付与する」ことにより焦点を表示するのだが、例えば文全体が焦点範囲である文焦点の場合など、焦点範囲が =du の形式的ホスト（文節）より広い場合でも du 焦点構文を用いることができる。ただし、焦点助詞 =du は主節に 1 つのみ出現するのであり、「焦点に含まれる要素かどうか」を各語句ごとに指定するわけではない。=du の付与された要素を焦点形、=a（または =gyaa）の付与された要素を非焦点形、それらの IS 助詞が付与されてない要素を中立形とすると、du 焦点構文はこの 3 つの形の文中での位置関係を用いて焦点範囲を指定する。

本稿は、動詞述語を取る場合の du 焦点構文に関連して、次の 2 点を示すことを目的としている。

(i) 池間西原方言の du 焦点構文は焦点範囲の開始位置を明示するものであり、その主な構文的特徴として①②という特徴を持っている。
　①焦点範囲より前の要素はすべて非焦点形とする（=a が付与される）
　②焦点範囲の開始要素（左端）は焦点形とする（=du が付与される）

(ii) 動詞活用形の一部に、=du を含む焦点形と同様の構文的・意味的特徴をもつものがある。

本稿の構成は次の通りである。まず 2 節で、池間西原方言の du 焦点構文のもつ焦点機能を示すとともに、本稿での記述に必要な用語・概念を導入する。3 節では、(i) で示した du 焦点構文の特徴を記述し、それを基に 4 節で (ii) の述語焦点形全般の特徴について記述し、また =du を伴わない述語焦点形の存在を示す。

2.　本稿で用いる用語と概念の整理

本節では、=du の焦点標識としての主な用法を示し、また 3 節以降で =du を用いた焦点構文（du 焦点構文）の特徴を記述するために必要な用語・概念を導入することを目的とする。まずは、=du を用いた焦点がその機能として **WH 焦点・ WH 応答焦点・対比焦点**というタイプの焦点を示すこと（2.1 節）、次に焦点標識と文中の意味的な焦点範囲との関係に基

5)　ここで非焦点助詞 =a と呼ぶものは、他の研究においては日本語の「は」に相当する主題標識とされる。池間方言では、主題はこの非焦点助詞が付与された要素のうちから語用論的に選ばれるが、これが主題そのものをマークするとする動機は特にないため、ここでは主題標識とは呼んでいない。また、=gyaa は対格専用の非焦点助詞である。

づき narrow focus / broad focus を区別すること、また文中のどの部分が焦点範囲となるのかに基づき、**項焦点・題述焦点・述語焦点・文焦点**を区別すること（2.2 節）について説明し、3 節以降の記述の準備とする。

その他、以下に稿で用いる主な用語の定義を前もって示しておく。

焦点形：焦点助詞 =du が付与された語句。「焦点形化」は、ある語句に =du を付与すること。

非焦点形：非焦点助詞 =a が付与された語句。「非焦点化」は、ある語句に =a を付与すること。

焦点範囲：文中において意味的に焦点解釈を受ける要素の範囲。

焦点構造：焦点を表示する特定の構文形式。

上記以外のものについては、議論の流れの中で説明を加える。

2.1. 焦点の語用論的機能と =du のもつ用法

「焦点」とされる形式がもつ機能は言語ごとに異なりがあるが[6]、池間西原方言の =du には少なくとも **WH 焦点**、**WH 応答焦点**、**対比焦点**の機能があると言える。WH 焦点は、WH 語句が形式的に焦点標識を受けるものである（2）。WH 応答焦点は疑問詞に応答する箇所を示すものである（3）。また、対比焦点は、情報の修正などを行う箇所を示すものである（4）。以降の例文では、池間西原方言の焦点形は**太字**、各文における実際の焦点範囲は $_F$[ ]、日本語訳における焦点対応箇所は**ゴシック体**で表すこととする。

（2）WH 焦点の例：

miga=a $_F$[**izya=nkai=du**] ifu-tai=ga

ミガ（人名）=NFOC どこ=DAT=FOC 行く-PST=WHQ

「ミガは**どこに**行ったの？」

（3）WH 応答焦点の例 （（2）への応答文）：

miga=a $_F$[**ssara=nkai=du**] ifu-tai

ミガ=NFOC 平良=DAT=FOC 行く-PST

「ミガは**平良に**行った」

（4）対比焦点の例：

miga=a, ssara=a ara-da, $_F$[**ucinaa=nkai=du**]$_F$ ifu-tai

ミガ=NFOC 平良=NFOC COP-NEG.CVB 沖縄本島=DAT=FOC 行く-PST

「ミガは平良ではなくて**沖縄本島に**行った」

なお、近隣方言である宮古語伊良部長浜方言でも =du の用法として、この WH 焦点、WH 応答焦点、対比焦点[7]の 3 つの用法が挙げられている（下地 2015）。WH 応答焦点、対

6） Krifka（2008）では、"answers to overt or covert questions, including selections from a list of items specified in the question, corrections, confirmations, parallels, and delimitation" （Krifka 2008:253）などが焦点形式のもつ典型的な語用論上の用法としてあげている。

7） 対比焦点 contrastive focus も研究者によってそこにどのような用法を含めるかが異なっているが、下地（2015）で提示されているのは修正（correction）機能のみであり、これは

比焦点は、通言語的に焦点標識がもつ典型的な機能である。WH 焦点は、琉球諸語内では南琉球の焦点標識に見られる特徴である[8]（下地 2015）。

本稿では、上記の WH 応答焦点もしくは対比焦点の用法を用いて du 焦点構文の特徴記述を行う。つまり、ある要素が「焦点範囲にある」という場合には、それぞれ意味的に WH 疑問の応答部分になっていること、もしくは修正した情報を示す部分になっていることを指すこととする[9]。ただし、本稿は池間西原方言の =du の持つ用法を網羅的に整理したものではない[10]。また、=du は主節だけでなく接続節末、またその内部に生起することもあるが、本稿では主節に現れる場合のみを扱う。

2.2.　焦点範囲の位置やサイズに関する分類

ここでは、du 焦点構文における =du が付与される要素と焦点範囲の関係について 3 節で説明するための準備として、narrow focus / broad focus の概念と、本稿で用いる「文中でどこが焦点範囲になるのか」に関する分類を示す。

2.2.1.　narrow / broad focus

2.1 節で提示した（2）～（4）の例は、すべて焦点範囲が =du が付与された要素のみとなっているが、du 焦点構文においては =du が付与された要素より広い範囲を焦点標識としてとることができる。次の（6）は、（3）と全く同形式を用いた du 焦点構文が異なる焦点範囲をとりうることを示している。

（5）miga=a $_F$[**ssara=nkai=du**] ifu-tai　（=（3））
　　「ミガは**平良に**行った」

（6）miga=a $_F$[**ssara=nkai=du** ifu-tai]
　　（ミガはどうしたの？）「ミガは**平良に行った**」

形式的に同じ焦点構造が焦点解釈において曖昧性をもつことはさまざまな言語で観察され[11]、焦点範囲を狭くとる場合は narrow focus、広くとる場合は broad focus と呼ばれる（Lambrecht 1994）。本稿の池間西原方言の記述においては、（5）のように焦点標識が付与された要素のみが焦点範囲となる場合の焦点を narrow focus、（6）のように焦点範囲がそれより大きい範囲となる場合を broad focus と呼ぶこととする。

---

contrastive focus のもつ典型的な用法である（Krifka 2008）。本稿においても、対比焦点の機能としては「修正」ひとまずのみを設定する。

8）疑問詞自体に焦点の機能を認めることは必ずしも一般的ではないが、多くの言語で疑問詞語句はその言語における焦点形式で現れるという傾向はある。

9）また、ここでは焦点範囲の最小単位は、IS 助詞付与の単位（主に文節に対応）とし、さらにその中の一部が焦点となる場合は扱わない。

10）例えば、池間西原方言の =du は、注 6 に示した confirmation の機能も持っている。

11）例えば、英語の "I bought a book." という文において book の部分にイントネーション上のアクセントを付与した場合（BOOK と大文字で表現する）、I [bought a BOOK]$_F$ と I bought [a BOOK]$_F$ の 2 種類の焦点解釈が可能である。

2.2.2.　文中での焦点範囲に基づく焦点のタイプ

文中のどの部分が焦点範囲となるのかを示す分類については、項焦点（argument focus）、述語焦点（predicate focus）、文焦点（sentence focus）の３つを分けるのが一般的である（Lambrecht 1994 など）。本稿では、池間西原方言の記述のために、このうち述語焦点を題述焦点[12)]と述語焦点の２つに分け、４つのタイプを区別する[13)]。（繰り返すが、日本語の例中のゴシック体は、意味的な焦点範囲を示している。）

a. 項焦点：焦点範囲が述語より前の項部分にある場合。

例）（花子は何を買ったのか？）「花子は**おもちゃを**買った。」

b. 題述焦点：焦点範囲が述語と一部の項にある場合。

例）（花子は今日何をしたのか？）「花子は**おもちゃを買った。**」

c. 述語焦点：焦点範囲が述語のみである場合。

例）（花子はおもちゃをもらったの？）「花子はおもちゃを**買った。**」

d. 文焦点：主題となる項がなく、文のすべてが焦点範囲に含まれる場合。

例）（何があったの？）「**花子がおもちゃを買った。**」

このうち、4 節で見る池間西原方言の述語焦点形が担う焦点範囲解釈上の意味は、c. 述語焦点である。詳しくは 4.2 節で扱う。

3.　池間西原方言の du 焦点構文の特徴

本節では、池間西原方言の du 焦点構文の特徴を記述する。まず 3.1 節で du 焦点構文による焦点表示システムについて概観し、3.2 節でそれが具体的にどのように現れるのかを見るとともに、項焦点・題述焦点・文焦点・述語焦点（2.2.2 節で提示）のそれぞれがどのような形式で表されるのかを整理する。

3.1.　池間西原方言の焦点表示システム

池間西原方言には各語句末（文節末）に付与される IS 助詞として焦点助詞 =du と非焦点助詞 =a（および =gyaa）[14)]の 2 種類が認められ、これらが共同して du 焦点構文を形成

12）風間（2016）による用語。ただし、風間は、これまで述語焦点と呼ばれてきたものを題述焦点と呼んでいる。「述語焦点」は、もっぱら動詞句を焦点範囲をする場合に用いられてきたが、池間西原では焦点範囲が動詞と目的語などを合わせた動詞句相当のものである場合とそのような項を含まない述語のみが焦点範囲になる場合とで形式が異なるため、前者を題述焦点、後者を述語焦点として区別している。

13）このほか、述語焦点形のもちうる解釈として真偽焦点 verum focus（Höhle 1988, Lohnstein 2016 など参照）もあると考えられる。真偽焦点は、文の真理値が焦点となり、それが真であることを強調する意味になるものである。例えば、英語における "She DOES like broccoli." において、助動詞とイントネーションの卓立で真偽焦点が表されている。述語焦点形は宮古語において可能表現としても用いられ、それを説明する場合には真偽焦点も必要となると考えられるが、本稿ではこれを扱う余地がないため、4.3 節で簡単に触れるにとどめる。

14）このほか、「～も」を表すとりたて助詞の =mai も、ここで見る非焦点助詞と同じふるまいをすることが分かっている。=mai は主格助詞とは共起しないが、対格助詞も含めそれ以外の格とは共起する。=mai はさらに=du を後接できるという点で =a と異なっている。

する。=du が付与された要素は必ず焦点範囲にふくまれる焦点形となり、=a（=gyaa）が付与された要素は必ず焦点範囲に含まれない非焦点形となり、このほか両方付与されず焦点・非焦点どちらにも解釈できる中立形がある。非焦点助詞 =a は、日本語の主題標識「は」と同様、主格助詞・対格助詞とは共起せず、これらに付与する場合は格助詞は削除される。ただし、対格専用非焦点助詞 =gyaa[15] については、対格助詞と共起する。表 1 は、それぞれの形が主格、対格、それ以外の格（表では向格）に付与された場合の具体的な現れを示している。

表 1　中立形・焦点形・非焦点形の具体的な形式　（miga（人名）に付与した場合）

	主格 =ga	対格 =u	向格 =nkai
中立形	miga=ga	miga=u	miga=nkai
焦点形（=du 付与）	miga=ga=du	miga=u=du	miga=nkai=du
非焦点形（=a 付与）[16]	miga=a	miga=a / miga=u=gyaa	miga=nkai=ya

1 節で述べたように、du 焦点構文は基本的に「焦点範囲の開始要素（左端要素）を明示する」ものである。本節では、焦点形・非焦点形・中立形の文中での位置関係を観察し、そのことを示す。

du 焦点構造の中心的な部分は、「=du は焦点範囲の最初の（最左の）語句に付与され、それより以前の（左の）要素にはすべて非焦点助詞 =a が付与される」ということである。つまり、文中で最初の焦点形が出てくる以前の要素はすべて非焦点形であり、そこに中立形は出現できない。中立形が出現するのは焦点形より後の環境である。また、この中立形は、主格主語の場合をのぞき、焦点・非焦点のどちらにも解釈できる。焦点範囲の開始要素である =du が付与された要素だけが焦点範囲となる場合（narrow focus）と、それを含めそれ以降の中立形の要素も焦点範囲となる場合（broad focus）があり、どこで焦点範囲が終わるか（焦点範囲の右端）は必ずしも明示されない。ただし、非焦点形にして焦点に入らないことを明示することは可能である。この非焦点形・焦点形・中立形それぞれが可能な焦点解釈を（7）に、文中での位置関係を（8）に模式的に表す。

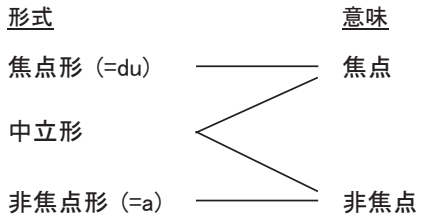
15）他の宮古語諸方言での =ba(a) に相当する。また、=gyaa は別の意味を持つとりたて助詞としての用法もあるが、ここでは扱わない。

16）非焦点助詞 =a および対格助詞 =u は、付与先の末尾の音に従って形態音韻変化を起こす。次の表で各末尾音に付与された場合の =a の形式を示す。

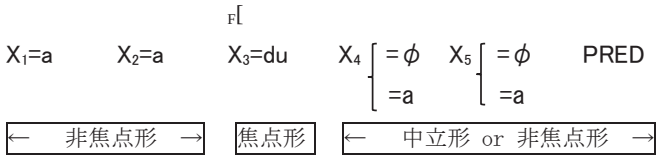
表：非焦点助詞 =a の現れ

語末の音	=a	例	
-C	-C=Ca	海 in	in=na
-Cɨ	-C=Ca	牛 usɨ	us=sa
-Ca	-Ca=a	傘 sana	sana=a
-Ci	-Cja=a	酒 saki	sakja=a
-Cu	-Cu=u	蛸 taku	taku=u
-VV	-VV=ja	木 kii	kii=ja

（7）焦点形・非焦点形・中立形それぞれの焦点解釈



（8）du 焦点構文における焦点形、非焦点形、中立形の位置関係



以上のことを含め、（9）に池間西原方言における du 焦点構文の性質をまとめる。

（9）池間西原方言における du 焦点構文の性質（主節）

構成：

① 焦点範囲より前の要素はすべて非焦点形とする（=a が付与される）[17)]

② 焦点範囲の開始要素（左端）は焦点形とする（=du が付与される）

（①②：焦点形の前には中立形は出現できない）

IS 助詞の出現回数制限：

③ 焦点形（=du）は、一つの主節につき一回のみ現れる。非焦点形（=a）には出現回数制限はない。

焦点形より後の要素の焦点解釈：

④ 焦点形（=du が付与された要素）より後の環境であれば、中立形は焦点にも非焦点にも解釈できる。ただし、主語（主格助詞付）は除く。

⑤ 焦点範囲の終わりは明示しなくてよいが、焦点範囲に入らない要素を非焦点形にする（ある要素が非焦点であることを明示する）ことはできる[18)]。

次節ではこれらの性格付けについての具体的な現れを示す。

17）時を表す副詞などは、必ずしもこれに従わない可能性もあるが、詳細は未調査である。また、注 19 に示すように、中立形の項が現れるのを避けるのが重要であり、必ずしも =a を付与するという方法がとられない場合もある。

18）動詞述語においてははっきりと非焦点形とみなせるものはなく、中立形もしくは焦点形となる。ただし、述語焦点・真偽焦点となれない、つまり単独で焦点となることができない活用形がある（連体形）。林（2013）などではこれを非焦点形としていたが、題述焦点がとれるとみなすことができるため、焦点範囲に全く入ることができない非焦点形とは異なっている。この形式については、稿を改めて議論することとする。また、動詞述語の焦点形については 4 節で述べる。

3.2.　具体的な現れ

3.2.1.　焦点形と非焦点形の位置関係（①②の検討）

ここでは、(9) に示した du 焦点構文の特徴のうちの①②、つまり「焦点形の前には非焦点形しか出られない（中立形は出現できない)」ことを見る。(10) ～ (13) では、焦点形の要素だけを焦点範囲とする narrow focus を、「ユヌスがおばあの家でお菓子を食べている」を意味する文において、順番に前の要素からあてはめた例を以下に提示する。なお、項焦点の場合は WH 応答焦点を用いているが、述語焦点の場合については、文の自然さのために対比焦点を用いている。

(10) F[**yunusi=ga=du**]　obaa=ga yaa=n　kaas=su　fai ui
ユヌス(人名)=NOM=FOC　おばあ=GEN 家=DAT 菓子=ACC　食べる.CVB ASP.NPST
（誰がおばあの家でお菓子をたべているの？）「**ユヌスが**おばあの家でお菓子を食べている」

(11) yunus{=sa/*=ga}　F[**obaa=ga yaa=n=du**]　kaas=su　fai ui
ユヌス(人名){=NFOC/*=NOM}　おばあ=GEN 家=DAT=FOC　菓子=ACC　食べる.CVB ASP.NPST
（ユヌスはどこでお菓子をたべているの？）「ユヌスは**おばあの家で**お菓子を食べている」

(12) yunus{=sa/*=ga}　obaa=ga yaa=n{=na/*=φ}　F[**kaas=su=du**]　fai ui[19)]
ユヌス(人名)={NFOC/*=NOM}　おばあ=GEN 家=DAT{=NFOC/*=φ}　菓子=ACC=FOC　食べる.CVB ASP.NPST
（ユヌスはおばあの家で何を食べているの？）「ユヌスはおばあの家で**お菓子を**食べている」

(13) yunus{=sa/*=ga} obaa=ga yaa=n{=na/*=φ}　kaas=su{=gyaa/*=φ}　F[**fai=du** ui]
ユヌス(人名)={NFOC/*=NOM}おばあ=GEN 家=DAT{=NFOC/*=φ}菓子=ACC{=NFOC2/*=φ}　食べる.CVB=FOC ASP.NPST
（ユヌスはおばあの家でお菓子を作っているの？）「ユヌスはおばあの家でお菓子を（作ったのではなく）**食べている**」

述語については =du が補助動詞構文の中に現れているが、述語焦点の特徴については 4 節で改めて扱う。

(10) ～ (13) から観察できるように、池間西原方言では、焦点形より以前の要素は、必ず中立形でなく非焦点形でなければならない[20)]。

---

19) (12) および (13) における obaa=ga yaa=n「おばあの家で」について、非焦点形の obaa=ga yaa=n=na でなく、obaa=ga yaa=n urii「おばあの家にいて」など従属節に置き換えるほうが自然とされる場合がある。その場合でも、obaa=ga yaa=n という中立形が許容されず、=du の付与された要素より前では「中立形を避ける」ストラテジーが取られていることに変わりはない。また、本稿では触れなかったが、必ずしも WH 応答箇所が =du の付与先と一致しない場合がある。例えば、「ユヌスはおばあの家で何を食べているのか？」に対する回答としては、yunus=sa **obaa=ga yaa=n=du** kaas=su fai ui と、「おばあの家で」にあたる部分に =du が付与される場合もあった。これは、=du が WH 応答箇所を示す機能とは別の要因で、文の中でより自然な位置を持つためであるという可能性があるが、詳細は未調査である。

20) これは語順を入れ替えても保たれる特徴であり、例えば（向こうに牛を見つけて）「**牛がむこうにいる**」という文焦点の文について、F[**usi=nu=du** kama=n uri ui]（牛=NOM=FOC 向こう=DAT いる ASP.NPST）や、F[**kama=n=du** usi=nu uri ui]（向こう=DAT=FOC 牛=NOM

3.2.2.　焦点形と焦点範囲の関係（③の検討）

前節の（10）～（13）では narrow focus の例を見たが、本節では同じ構文が broad focus となるケースを見ることで、焦点形と焦点範囲の関係を見る[21]。du 焦点構文は、焦点形より後の中立形の要素を焦点範囲に含みうる。このことを、（10）の例文を用いて焦点範囲の広さを操作しながら（14）～（16）に示す。また、（17）では（11）と同じ形式がより広い焦点範囲をとる場合を示す。

（14）$_{F}$[**yunusi=ga=du**　obaa=ga yaa=n　kaas=su　fai ui]
ユヌス(人名)=NOM=FOC　おばあ=GEN 家=DAT　菓子=ACC　食べる.CVB ASP.NPST
（なにがあったの？）「**ユヌスがおばあの家でお菓子を食べている**」

（15）$_{F}$[**yunusi=ga=du**　obaa=ga yaa=n　kaas=su]　fai ui
ユヌス(人名)=NOM=FOC おばあ=GEN 家=DAT　菓子=ACC　食べる.CVB ASP.NPST
（誰がどこで何を食べているの？）「**ユヌスがおばあの家でお菓子を**食べている」

（16）$_{F}$[**yunusi=ga=du** obaa=ga yaa=n]　kaas=su　fai ui
ユヌス(人名)=NOM=FOC おばあ=GEN 家=DAT　菓子=ACC　食べる.CVB ASP.NPST
（誰がどこでお菓子を食べているの？）「**ユヌスがおばあの家で**お菓子を食べている」

（17）yunus{=sa/*=ga}　$_{F}$[**obaa=ga yaa=n=du**　kaas=su　fai ui]
ユヌス(人名){=NFOC/*=NOM} おばあ=GEN 家=DAT=FOC 菓子=ACC 食べる.CVB ASP.NPST
（ユヌスは何をしているの？）「ユヌスは**おばあの家でお菓子を食べている**」

以上、ここでは、du 焦点構文が焦点形より後ろの中立形の要素を焦点範囲として含みうることを見た。これと前節で見た焦点形の前の要素は必ず非焦点形となることを合わせて、池間西原方言では、du 焦点構文は「焦点範囲の開始位置を示すもの」ということができる。

3.2.3.　焦点形より後の要素の形式と焦点解釈の関係（④の検討）

3.2.1 節、3.2.2 節で見たように、焦点形以降の要素は、中立形の場合、焦点にも非焦点にもなりうる。なお、非焦点を明示したければ非焦点にすることもできる。

（18）$_{F}$[**yunusi=ga=du**]　obaa=nu　yaa=n{=ϕ/=na} kaas=su{=ϕ/=gyaa}　fai ui
ユヌス(人名)=GEN=FOC　おばあ=GEN 家=DAT 菓子=ACC{=ϕ/=NFOC}　食べる.CVB ASP.NPST
（誰がおばあの家でお菓子をたべているの？）「**ユヌスが**おばあの家でお菓子を食べている」

ただし、主格助詞 =ga の付与される主語についてのみ、=du の付与された焦点形より後にあっても、焦点でない場合は必ず中立形でなく非焦点形としなければならない（19）。

（19）$_{F}$[**obaa=ga yaa=n=du**]　yunus{=sa/*=ga}　kaas=su{=ϕ/=gyaa} fai ui
おばあ=GEN 家=DAT=FOC　ユヌス{=NFOC/=NOM}　菓子=ACC{=ϕ/=NFOC}　食べる.CVB ASP.NPST
（ユヌスはどこでお菓子をたべているの？）「**おばあの家で**ユヌスはお菓子を食べている」

いる ASP.NPST）とすることはできるが、*usi=nu **kama=n=du** uri ui や *kama=n **usi=du=nu** uri ui のように焦点形に中立形が先行することは許容されない。

21）=du がその直接の付与先よりも広い焦点範囲をとることは、宮古語や八重山語の他方言においても、同様の報告がなされている（Koloskova 2006, Davis 2013, Shimoji 2015）。

3.2.4.　文中における焦点範囲の種類と形式の対応のまとめ

このように、du 焦点構文における文中での焦点範囲と =du の位置をまとめ、それぞれに対応する（10）～（18）の例文を示すと、以下のようになる。

a. 項焦点：焦点となる項に =du を付与する (10)(11)(12)(15)(16)(18)

b. 題述焦点：焦点範囲の最初の項に =du を付与する (17)

c. 述語焦点：述語焦点形を用いる (13)

d. 文焦点：文の最初の要素に =du を付与する (14)

ここまでで述べたように、=du が焦点範囲の左端につき、焦点範囲の右端の表示については義務的ではないという性質上、同じ形式の文が上記の a/b および a/d 両方の解釈をもつことが可能である。

次節では「c. 述語焦点」を表す du 焦点構文をつくる述語焦点形について、さらに見ていく。

4.　述語焦点形式について

ここまでは =du を付与した焦点形を見てきたが、動詞述語の焦点形には、この =du を含むものとそうでないものがある。4.1 節ではまず動詞の述語焦点形自体がどのようなものか見たうえで、4.2 節でその構文的特徴を見る。また、4.3 節では、述語焦点を表す形式とは考えられない述語焦点形の用法について述べる。

4.1.　述語焦点を作る形式

動詞述語文において述語焦点を指定する形式、すなわち述語焦点形には、補助動詞構文に =du を介在させるものと、動詞活用形のうちの焦点形がある。このうち後者には、du を含んだものと、du を含まないものがある。

表 2　各種述語焦点形

	形式特徴	例（ai「ある」）
補助動詞構文	補助動詞構文の本動詞（接続形）に =du を付与	arii=du ui
dusɨ 焦点形	u/ɨ 語基に接辞 -dusɨ を付与する活用形[22]	ai-dusɨ
特殊焦点形	i 語基と同形の活用形[23]	ari

dusɨ 焦点形 については、語源的に =du を含んだ形である[24]。特殊焦点形については、現在のところ、自然に聞き取り調査で抽出できるものは状態動詞である ai「ある」 ui「いる」

22）語基が変化するタイプの動詞活用には a 語基、u/ɨ 語基、i 語基があり、例えば kafu「書く」ではそれぞれ kaka、kafu (kaci)、kaki で現れる。

23）いわゆる中止形語幹に相当する。

24）「～ぞする」にあたる形とされ、sɨ 部分は asɨ「する」に由来している。また、過去形 -dusɨtai もある。他方言における分析で、これを活用形とみなさず、動詞連続体の前項に=du が付与されているとする見方もある（Shimoji 2015）。

sii「知る」 nci「いっぱいである」に限られているが[25]、これらもごく一般的に用いられる。これら２つの焦点形の述語焦点としての用法の違いは現時点ではないと考えられる。

それぞれを用いた例文については次節で提示する。

4.2. 述語焦点形の特徴

述語焦点形は、ここまで見てきた du 焦点構文における焦点形と同じふるまいを見せる。すなわち、述語より前の要素はすべて非焦点形となる。以下では、このことを示す例を動詞 ai「ある」を用いてそれぞれの述語焦点形において見る。ここでは対比焦点を用いる。

（20）kuma-nagi=n{=na/*=φ} taa{=ya/*=nu} F[**arii=du** ui]

ここ-あたり=DAT{=NFOC/*=φ} 田{=NFOC/*=NOM} ある.CVB=FOC ASP.NPST

（このあたりに田んぼはないの？）「このあたりには田は**ある**」

（21）kuma-nagi=n{=na/*=φ} taa{=ya/*=nu} F[**ai-dusi**]

ここ-あたり=DAT{=NFOC/*=φ} 田{=NFOC/*=NOM} ある-FOC.NPST

（このあたりに田んぼはないの？）「このあたりには田は**ある**」

（22）kuma-nagi=n{=na/*=φ} taa{=ya/*=nu} F[**ari**]

ここ-あたり=DAT{=NFOC/*=φ} 田{=NFOC/*=NOM} ある.FOC

（このあたりに田んぼはないの？）「このあたりには田は**ある**」

以上のように、述語以前の要素はすべて非焦点形とする必要があり、これは３節で述べた du 焦点構文の焦点形の特徴と同じである。以下、別の動詞における特殊焦点形の例を提示する。

（23）ba{=a/*=φ} uri=u{=gyaa/*=φ} F[**ssi**]

1.sg{=NFOC/*=φ} これ=ACC{=NFOC/*=φ} 知る.FOC

（あなたはこれを知らないのか？）「私はそれを**知っている**」

（24）in{=na/*=φ} kama=n{=na/*=φ} F[**uri**]

犬{=NFOC/*=φ} 向こう=DAT{=NFOC/*=φ} いる.FOC

（犬はむこうにいないのか？）「犬はむこうに**いる**」

（25）taa{=ya/*=φ} kuma=n{=na/*=φ} F[**nci**]

田{=NFOC/*=φ} ここ=DAT{=NFOC/*=φ} たくさんある.FOC

（田はここにたくさんないのか？）「田はここに**たくさんある**」

4.3. 述語焦点形のさらなる用法と問題点

（20）～（25）で見たものは述語焦点の例としてあげているが、ここでは、動詞の焦点形を用いているにも関わらず述語焦点でないと考えられるものをあげる。

（26）kara=a nau=yu=mai { **fai=du** ui / **fau-dusi** }[26]

3.sg=NFOC 何=ACC=も {食べる.CVB=FOC ASP.NPST /食べる-FOC.NPST}

「あの人はなんでも食べる」

25）それぞれ特殊焦点形は ari、uri、ssi、nci となる。

26）注 14 にあるように、=mai「～も」も焦点構文において非焦点助詞と同じふるまいをする。

（26）の例は、「あの人は何も食べないよ」「いや、あの人はなんでも食べる」という文脈であれば述語焦点として捉えられるかもしれないが、ただ話者がある人について描写している文脈であれば、題述焦点もしくは真偽焦点[27]であると考えられる。

状態動詞以外の述語焦点形は、もっぱらこのような属性叙述の文で使用されるほか、可能表現としての用法ももっている[28]。可能表現として使用される場合、4.2 節で見た「述語より前の要素がすべて非焦点形となる」という制限は緩まる。

（27）ba=a　ikima=taahii　{ **uugii=du** ui / **uuzi-dusi** }
1.sg=NFOC 池間=まで　{泳ぐ.CVB=FOC ASP.NPST / 泳ぐ-FOC.NPST}
「私は池間まで泳げる」

（27）の例では、ikema=taahii の部分が中立形で表れているが、非文ではない。=du を用いた可能表現は状況可能・能力可能の両方を表すことができ、また一時的であっても恒常的であっても用いることができ、可能表現としての文法化はかなり進んでいるといえる。（26）で見た属性叙述の例は、この可能表現につながる用法と考えられるが、本稿ではこれについてはこれ以上述べず、述語焦点形の述語焦点をつくる以外の用法について触れるに留める。

5.　まとめと展望

本稿では、池間西原方言の du 焦点構文における IS 助詞による焦点表示システムについて記述し、焦点形・非焦点形が共同して焦点範囲の開始位置を決めていること、また、述語焦点専用形式のうちに、=du を含まず焦点形となる動詞の活用形があることを示した。

本稿で扱ったのは =du を用いた場合の焦点構造であり、du は必ずしもすべての焦点表示に必要なわけでなく、逆に動詞述語（活用形）の種類によっては du 焦点構文をとれないものもある。du 焦点構文では焦点形と非焦点形による 2 重のマーキングになっていることを示したが、du を用いずに焦点を示す場合、つまり非焦点形と中立形のみで焦点を示す場合も、基本的に焦点以前の要素を非焦点形とし、最初に来る中立形が焦点範囲の開始位置になると考えられる。ただし、この性質は焦点形がある場合よりも緩く、イントネーションなどで変更しうるようである。それでも、やはり「焦点範囲より前の要素を非焦点形とする」ということが焦点範囲を決めるうえで重要な操作になっていることは確かであり、du 焦点構文もそれ以外の焦点構造も含めれば、項側の焦点表示において主要な働きをしているのは =du の付与よりも非焦点助詞による非焦点形化であるといえる可能性もある[29]。非焦点形化という操作があるにも関わらず、何故焦点表示において焦点助詞 =du が用い

27）注 13 参照。
28）内間（2011）によれば、このような =du を含む述語が可能表現として用いられるのは、琉球の中でも宮古語のみである。宮古語の du 焦点構文の在り方が他の琉球諸方言と異なる可能性があることを示唆している。また、特殊焦点形について、4.2 節であげた「ある」「いる」「知る」「たくさんある」を表す以外の動詞でも、可能表現としては用いることができるようだが、あまり一般的でなく、限られた条件でしか現れない。
29）Koloskova（2006）、コロスコワ（2007）で、宮古語の目的語の焦点表示について同様の指摘がなされている。

られるのかについては、林（2016）が =du のもつ文モダリティ機能によるものである可能性を示唆している。これについてはさらなる考察を要するものであり、稿を改めて議論する。

【参考文献】

内間直仁（2011）「琉球方言における可能表現」『琉球方言とウチ・ソト意識』研究社.

風間伸次郎（2016）「情報構造の類型論的研究―「係り結び」の位置づけとも関連させて―」NINJAL プロジェクト「日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成」（2016 年 9 月 19 日）研究発表会発表資料.

コロスコワ，ユリア（2007）「琉球語宮古方言の直接目的語の標識と他動性」角田三枝・佐々木冠・塩谷亨（編）『他動性の通言語的研究』pp.283-294, くろしお出版.

下地理則　（2015）「焦点化と格標示」『日本言語学会 151 回大会予稿集』pp.396-401.

林由華（2013）「南琉球宮古語池間方言の文法」京都大学大学院博士論文.

―――（2016）「南琉球宮古語池間（西原）方言における焦点助詞 du と述語動詞モダリティの相互関係」『日本言語学会第 152 回大会予稿集』pp.144-149.

Davis, C. (2013) Surface position and focus domain of the Ryukyuan focus particle 'du': evidence from Miyara Yaeyaman. *IJOS: International Journal of Okinawan Studies*. 4.1, pp.29-49.

Höhle, Tilman N. (1988) VERUM-Fokus. *Sprache und Pragmatik*. 5, 1-7.

Koloskova, Y. (2006) Focus particles with direct objects in Miyako dialect of Ryukyuan. 日本言語学会第 133 回大会予稿集. pp.47-52.

Krifka, M. (2008) Basic notions of information structure. *Acta Linguistica Hungarica.* 55 (3-4), pp.243-276.

Lohnstein, H. (2016) Verum focus. In Caroline Féry and Shinichiro Ishihara (eds.) *The Oxford Handbook of Information Structure*. Oxford: Oxford University Press, pp.290-313.

Shimoji, M. (2015) Kakarimusubi in the Irabu dialect of Ryukyuan. Paper presented at International Workshop “Kakarimusubi from a Comparative Perspective”, NINJAL, September 5-6, 2015.

【略号一覧】

1 一人称; 2 二人称; ACC 対格; ASP アスペクト; COP コピュラ動詞; CVB 副動詞; DAT 与格; FOC 焦点; GEN 属格; NEG 否定; NFOC 非焦点; NOM 主格; NPST 非過去; PST 過去; SG 単数; WHQ 疑問詞疑問

はやし　ゆか（日本学術振興会 PD／国立国語研究所）
yufaster@gmail.com